
原 著

2 卵性双生児の妹の死により PTSD をきたした患児への箱庭療法の経験

二 宮 恒 夫, 谷 洋 江

徳島大学医学部保健学科母子看護学講座

要 旨 2 卵性双生児の妹の死により, 外傷後ストレス障害をきたした患児に箱庭療法を行った。患児 (7 歳11カ月) は, 暗い所には行くことができず, 嫌な夢を見ることが多かった。学校では, ささいなことで感情的になり暴力行為に及んでいた。授業にも集中できず, 気に入らない課題には取り組まず, 担任にだまって早退していた。図工では人の顔が描けなかった。妹が入院していた病棟を見るのを嫌がったため, 別の棟で箱庭療法を開始し, 約1年半の間に17回行った。動物の屍骸, 恐竜が動物を襲う, 弱肉強食など, 死をテーマにした作品が多かった。命日の後は, 親子の動物を並べた動物園の作品であった。箱庭療法を始めて, 学校生活における情緒不安による行動は改善した。箱庭の作品に妹の死を繰り返し表現し, 過去のできごととして整理し受け入れていったと思われる。

キーワード: 喪失体験, 外傷後ストレス障害, 箱庭療法

はじめに

精神保健分野における危機は, 成熟的危機, 偶発的危機, 状況的危機に分けられる。成熟的危機は, 発達段階において社会的環境に適応しようとして生じる心理的葛藤であり, 偶発的危機は自然災害に起因するものをさす。状況的危機は, 対象の喪失や, 病気, 事故, 受験の失敗など, 生活上のストレスから生じ, 心理的混乱をもたらす。

対象の喪失, 特に子どもが病気で死亡した場合, 両親の深い悲しみだけでなく, きょうだいへの心理的影響の大きさは計りしれない。親の死の子どもへの影響の報告はあるが, 子どもの死のきょうだいへの影響や, その支援についての報告は, 日常臨床で経験するにもかかわらず少ない¹⁾。今回, 2 卵性双生児の妹の死により外傷後ストレス障害 (posttraumatic stress disorder, PTSD) をきたし, 箱庭療法により改善した事例を経験したので報告する。心理的ケアは病気の子どもや両親だけでなく, きょうだいに対しても忘れてはならないことを強調したい。

妹の概要

妹は, 2 卵性双生児の第2子, 37週, 2,450g で出生。家族は, 両親, 2 卵性双生児の患児, 次女 (妹が発病したとき, 次女の年齢は1カ月) の5人家族。

平成 X-5 年1月 (平成 X 年を患児の兄に関わり始めた年とする), 咳, 発熱のため近医を受診。妹の初診時年齢は2歳8カ月。貧血, 血小板減少を指摘され, ただちに当院小児科に紹介入院となった。

入院時身体所見は, 体重12kg (12.7kg), 身長88.3cm (90.1cm), 顔色の不良, 咽頭の発赤を認めた。末梢血液検査では, 全血球成分の減少を認め, 骨髄検査では低形成性であったが, 異常細胞はみられなかった。血清化学検査では, 血清蛋白が6.3g/dl と少し低値であった以外は異常なかった。

再生不良性貧血と診断され, 治療は, □グロブリン大量療法, ステロイドパルス療法, ALG (anti-lymphocyte globulin) 療法の他に, エリスロポエチンや G-CSF (granulocyte-colony stimulating factor) の造血因子が投与されたが効果はなかった。骨髄移植が準備されていたが, 平成 X-1 年12月 (7歳7カ月) に敗血症で死亡した。全経過は約5年であった。

2003年2月20日受理

別刷請求先: 二宮恒夫 〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15
徳島大学医学部保健学科母子看護学講座

兄（患児）の経過

1) 電話相談

平成 X 年 4 月、母親から患児（7 歳 11 カ月、小学校 2 年生）の学校での頻繁な暴力行為の対応についての電話相談を受けた。妹の外来通院中に、筆者が当院小児科にて心身症外来を担当していることを、母親が知っていたことが電話相談のきっかけになった。患児は、ささいなことがきっかけで急に暴れたり、友人の冗談を解せず、感情的になり暴力行為に及んでいた。妹の死の以前には、このような行為はなかった。その度に教頭が別室で気持ちをほぐしていた。また、学校では気に入らない課題には取り組もうとせず、担任の許可も受けずかってに早退していた。図工の授業で「冬休み中の楽しいことを絵に描いてください」の課題に、「楽しいことはなかった」と言い、黒いクレヨンで手だけを描いた。「他の身体部分や顔を描いたら」の誘いに、「顔は描けない」と言った。

家庭では情緒不安になることは少なかったが、暗いところに行けなかった。嫌な夢ばかりみていたが、亡くなった妹があらわれたときは楽しいと言う。

母親は妹の病状を患児に伝え、家にいることができないことを患児は納得してくれていると思っていた。やはり母親と離れていることはさびしかった。患児は家ではビデオばかりみていた。骨髄移植の準備検査のために、妹と母親が他県に出かけるときは、食事もしなくなった。後日わかったことであるが、この治療で妹は治癒し元気に帰ってくると信じていた。

母親に箱庭療法を提案した。患児は外来診察室や病棟が見えるところには絶対に行きたくないとのことであった。箱庭療法の部屋は、外来棟や病棟と別の棟にあることを伝えた。病院の正門は通らなければならないが、直接この部屋に来所することを勧め、箱庭療法を開始した。

2) 箱庭療法

筆者と患児は箱庭療法の部屋での面接が初対面であった。砂の入った箱、棚の動物や人形などを見せ、自由に作ってよいことなど、箱庭療法について説明した。

平成 X 年 6 月から平成 X+1 年 12 月まで、およそ 1 カ月に 1 回のペースで計 17 回行った。患児は作品を作る前には砂をかき混ぜ、動物を砂の中に隠して遊んだ。作品完成までは毎回およそ 1 時間を要した。箱庭療法を遊びのひとつとしてとらえ、2 回目以後の来所も楽しみに

した。箱庭療法の期間中、妹の命日を 2 回迎えた。また、筆者は患児にとって学校の場面を知らない人間、妹にかかわっていない人間であることから、筆者との継続的なかわりにも安心できたようである。箱庭療法中、患児からは学校のできごとの話も、妹の話もなかった。ただ、筆者はそのときの箱庭の作品についての話し相手になった。

17 回の箱庭の作品は、表 1 にまとめた。作品は大きく 3 つのテーマに分けられた。海水浴と動物園、そして恐竜や哺乳動物、爬虫類、魚、動物の屍骸の登場する作品である。海水浴と動物園の作品は、それぞれ 2 回あり、作った時期は限られていた。海水浴は夏の 5 回目と 13 回目であり、動物園は命日直後の 9 回目と 17 回目であった。これら 2 回の間隔は約 1 年である。2 回目の作品は小学校 3 年生になってからの作品であり、情緒も安定していたためか、いずれもおもちゃが丁寧に置かれていた。初回の動物園の作品は、動物が雑然と檻の中に置かれていたのに対して、2 回目のものは比較的まとまり、しかも親子の動物が置かれた（写真 3 参照）。海水浴は夏の遊びの中で一番楽しかった出来事だったと言って作った。

恐竜などの登場する作品も回を重ねるに従って変化した。恐竜が襲われている場面から、弱肉強食の場面に、そして襲ったものを食べている逆襲の場面への変化である。写真 1 は第 1 回目の作品であり、恐竜やワニ、動物の屍骸、草、ビー玉が置かれ、「ビー玉が恐竜を襲っている」と言う。その後も恐竜、ワニ、象、鯨、サメ、カメ、タコ、カニ、カエル、トカゲなどが置かれ、これら動物どうしの闘いや弱肉強食の場面、そして動物の屍骸とビー玉が並べられる作品が続いた。写真 2 は、第 8 回目の作品で、海が描かれ、恐竜、ワニ、鯨、動物の屍骸、木、木の切り株、ビー玉が置かれている。ワニどうしの闘い、動物の屍骸を喰わえている恐竜、そして第 1 回目の作品で恐竜を襲っていたビー玉を喰わえていた。逆襲の場面が始めて登場した作品である。その後も、恐竜などが登場する作品は、闘いの場面が作られ動物の屍骸が置かれた。

3) 学校との連携

第 1 回目の箱庭療法終了後に、母親の許可を得て担任と教頭に電話による連絡をとった。学校の様子を聞いた上で、患児の学校生活での問題行動は、妹の死による PTSD によることが考えられると伝えた。患児は情緒不安定であり、暴力行為はささいなことがきっかけで生じ

表1：箱庭の作品の概略

<p>1回目（6月初旬）：恐竜（6匹）、ワニ（2尾）、動物の屍骸（1匹）、草、ビー玉（14個）。ビー玉が恐竜を襲っている作品（写真1参照）。</p> <p>2回目（6月下旬）：第1回目と同様に、恐竜やワニなどを置き、作り始めたが、その日は疲れていたせいで椅子に座りそのまま眠ってしまった。</p> <p>3回目（7月中旬）：恐竜（6匹）、ワニ（1尾）、カメ（4尾）、カニ（3匹）を箱庭の右上隅に重ねて置いただけにとどまった。</p> <p>4回目（8月初旬）：恐竜（7匹）、ワニ（2尾）、カメ（2尾）、象（1頭）、タコ（1匹）、カニ（4尾）、カエル（4尾）、トカゲ（2尾）、ビー玉（4個）、池、原っぱ。池にはカエル、ワニ、カニ。原っぱでは恐竜どうしの闘い、タコと恐竜の闘い、象と恐竜の闘い、ワニがカニを食べている。</p> <p>5回目（8月下旬）：海水浴。右半分は海。珊瑚礁、海藻、魚（11匹）、船（4艘）、海岸には灯台、カニ（3尾）、貝5個、人（4人）、車（7台）が整然と置いてある。</p> <p>6回目（9月下旬）：線路を丸く敷き、まん中に新幹線を置き、その右半分には家を、左半分には騎馬隊を多数置いている。右半分の線路外にも騎馬隊。他の3隅には家。左下隅の家の横にはソファ、そこに男女2人座っている。</p> <p>7回目（10月下旬）：中央原っぱに柵をこしらえ、象、トラ、ビュウマ、シカ、豚、木、切り株、車など雑然と積み上げている。周囲には柵、橋を渡っている車や人、椅子に座っている人、カメ、家、カエル、トカゲ、カニ、金魚、車、鳥などところ狭しと置いてある。右上隅に鳥居のある神社がひとつ置いてある。</p> <p>8回目（11月下旬）：恐竜（7匹）、ワニ（4尾）、鯨（1頭）、動物の屍骸（1匹）、木（7本）、木の切り株（1本）、ビー玉（8個）、池、海。池の中でのワニどうしの闘い、恐竜はビー玉を食わえている（写真2参照）。</p> <p>9回目（12月下旬）：動物園。象、ライオン、シマウマ、キリン、シカ、鳥、それぞれ複数頭（匹）を檻で囲んで入れている。動物の世話をしている人もいる。通路には、木、滑り台、ブランコ、テーブルとその上にりんご数個、椅子、車、テレビ塔、見物客も多数。</p> <p>10回目（翌年1月下旬）：箱庭の左下隅を中心に海を作り、海の中には船（3艘）、魚（2尾）、カニ（1尾）、海岸にもカニ（2尾）、海岸には木が3本、切り株（1本）、ワシ（1羽）、人（2人）、お城、ビー玉（13個）、そして動物の屍骸（1匹）。</p> <p>11回目（2月下旬）：線路を敷き詰めて新幹線を走らせている。中央に切り株（1本）、木（1本）、約20個のビー玉が比較的小範囲（左上隅）にかたまって置いてある。</p> <p>12回目（4月中旬）：箱庭を柵で横に3つの部分に仕切り、上部にはライオン（2尾）、トラ、シマウマ、キリン、シカ、キャンピングカーがあり、ライオンはシマウマやキリンを食わえている。中央には車、トレーラー、ヘリコプター、自転車、木、下部にはモーターカー（1台）が置いてある。</p> <p>13回目（7月中旬）：海水浴。右下1/4の海にはボート（4艘）、カニ（1尾）、タコ（1匹）。海岸にはカニ（3尾）、貝（3個）、人（2人）、車（7台）、ビー玉がまとめて置いてある。</p> <p>14回目（8月中旬）：恐竜（5匹）、うち3匹は動物の屍骸をくわえている。木（2本）、ビー玉が多数散りばめられている。</p> <p>15回目（9月下旬）：右1/3の範囲に海が作られ、鯨（3頭）、イルカ（2尾）、小魚（8尾）、ワニ（1尾）、珊瑚礁、ビー玉多数、海岸にはカニ（5尾）、ワニ（3匹）。2頭の鯨は小魚を食べ、2尾のワニはカニを食べている。</p> <p>16回目（10月下旬）：左側に少範囲の海、そこにはワニ（3尾）、魚（3尾）、魚がワニに食べられている。海岸には恐竜が7匹、2匹は闘っており、1匹は魚を食わえ、2匹は動物の屍骸を食わえている。その他に動物の屍骸が2匹、ビー玉（6個）、木（1本）。</p> <p>17回目（12月中旬）：動物園。親象（2頭）と子象（2頭）、親ブタ（4頭）と中くらい大きさのブタ（4頭）、子ブタ（3頭）、馬（6頭）、ワニ（2尾）が柵の中にきちんと入っている。柵の中でも働いている人がいて、通路にも人がいる。ビー玉が多数散りばめられている。池の中に魚を泳がせ、それにも囲いがある（写真3参照）。</p>
--

ている場合が多いと思われる。患児の暴力行為をいきなり咎め、理由を聞き出そうとしても無理かも知れない。まず行動に至った気持ちをよく聴き、感情的な行動を論しながら改善させるようにすることなど、患児への対応を話し合った。そして、今後も学校と密に連携し対応することにした。

4) 学校・家庭生活の経過

来所する度に、母親からは学校の様子が伝えられた。箱庭療法を始めてから学校を早退することはなく、友人との大きなトラブルもなくなった。情緒の不安定も急速に改善した。

平成X年8月のお盆のとき、家族一同で行う儀式の他に、患児は「妹が帰ってくる」と言って、ナスで馬を作り妹を迎える準備をした。

夏休みには、家族は意識的に患児を戸外に連れ出した。患児は、海水浴が一番楽しかったと話し、これが箱庭の作品として表現された。

2学期になって、運動会の練習も楽しくできた。図工の授業に人の絵が課題になったが、何かをつかもうとしている手は描けたが、顔はいぜんとして描けなかった。妹の一周忌が近づいた平成X年11月下旬、ささいなことでもいらだち、勉強にも集中力がなくなり、学校では注意されることが多くなっていた。「学校では僕ばかり

悪いと言われる」と、帰宅後泣くことが多かった。このころ夜尿が数日間続いた。妹の一周忌が終わると、学校でも落ち着きをとれどし、平成X年12月下旬（箱庭療法開始6カ月後）、図工の授業では顔を描くことができ、版画も野球バットをふっている子どもの全身の姿をきちんと彫ることができた。

3年生になって、サッカークラブに入り活躍するようになった。試合に優勝したせいもあり、学校生活は以前より楽しく過ごすようになった。この年の命日前には昨年のような情緒不安はなく、学校でも注意されることはなかった。

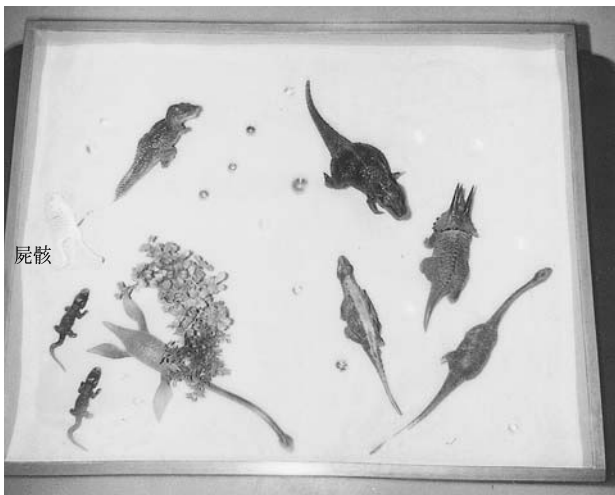


写真1：1回目（6月初旬）の作品。恐竜（6匹）、ワニ（2尾）、動物の屍骸（1匹）、草、ビー玉（14個）。ビー玉が恐竜を襲っている作品である。



写真2：8回目（11月下旬）：恐竜（7匹）、ワニ（4尾）、鯨（1頭）、動物の屍骸（1匹）、木（7本）、木の切り株（1本）、ビー玉（8個）、池、海。池の中でのワニどうしの闘い、恐竜はビー玉を食わえている。

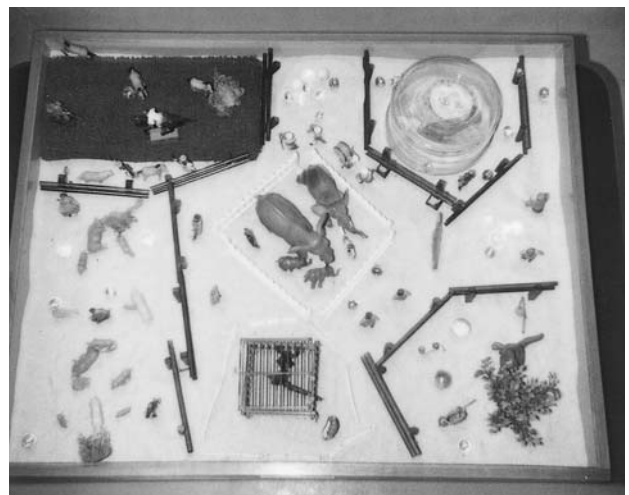


写真3：17回目（12月中旬）：動物園。親象（2頭）と子象（2頭）、親ブタ（4頭）と中くらい大きさのブタ（4頭）、子ブタ（3頭）、馬（6頭）、ワニ（2尾）が柵の中にきちんと入っている。柵の中でも働いている人がいて、通路にも人がある。ビー玉が多数散りばめられている。池の中に魚を泳がせ、それにも囲いがある。

考 察

1) PTSD について

PTSD の概念は、何らかの外的な出来事がショック体験を引き起こし、それが症状形成の核になるという考え方である。外的要因としては、死の危険にさらされるか、それに近い状況と定義されているが、直接自分にふりかかる死の危険だけでなく、目撃体験や、近親者がその種の体験にさらされた場合も含まれる²⁾。DSM-IV (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition-Revised) による心理的社会的ストレスの強さ尺度（小児および青年用）では、親の死は極度ないし破局的な強さとされている³⁾。今回の双生児事例のようなきょうだいの死もこの程度に相当すると考えられる。

PTSD の3つの中核症状は、過覚醒、フラッシュバックと呼ばれる現象に代表される再体験、回避・麻痺である³⁾。子どもによく見られる症状は、①過覚醒による不眠、おびえ、過敏反応、落ち着きのなさ、②恐い体験を思い起こすことによる興奮、過度の不安状態、人が変わったようになる、非現実的言動、恐い夢の繰り返し、③外界への反応性の低下・感情麻痺による乏しい表情、無口、引きこもり、食欲不振、集中力の低下、学業困難、④その他、過度の罪悪感、無力感、自傷行為、退行現象、吐き気、めまい、頭痛、腹痛、頻尿、夜尿、吃音、過呼吸などである^{4,5)}。

患児の嫌な夢の繰り返しや、死を表現した箱庭の作品

は再体験を意味している。また、妹が入院していた病院には行きたくないこと、人の顔が描けないことは、外傷を想起させる場所や思考・感情の回避である。学校での易刺激性や暴力行為、早退、学業への集中困難は、持続的な過覚醒の症状であり、DSM-IVによるPTSDの診断基準を満たしていた。

2) 箱庭療法について

喪失体験の心理過程は、ショック、否認、悲しみと怒り、適応、そして再起に至る過程をたどる。子どもは、そのときどきの感情を言語で表現することは苦手である。従って、子どもには描画や遊びなど言語表現以外の表現方法を与える。それによって、喪失体験に伴う感情を表現させ、それを過去の記憶として整理して、現在および未来に向けて適応の促進を図ることができる。

箱庭療法は、1965年に河合によって日本に紹介された遊戯療法のひとつである⁶⁾。箱の大きさは決まっていますが、内法72×57×7cmである。この箱の3分の2くらいまで砂が入れられており、箱の内側は青く塗られているので、掘ると海、川、湖が表現できるようになっている。この砂箱と、ミニチュアのおもちゃがセットになっている。感情表現が抑えられている子どもの心のイメージの表現手段として使用される。子どもは箱庭の作品に内的世界を表現し、それを整理し心の中を再構成することによって、表面の症状も改善する。

患児は、作品を作る際に砂遊びから始めた。箱庭療法は、患児にとって遊びの時間、そして学校でも家庭でもない第3の場所を提供できたようである。箱庭療法の部屋が病院敷地内にありながら、定期的に来所できたのは、このためであろう。また、筆者は患児にとって学校の場面を知らない人間、妹にかかわっていない人間である。筆者との面接は、いやな思い出の再体験に直接結びつかないことから安心できたようである。箱庭療法中は、患児から学校のできごとや妹の話はなく、筆者は箱庭の作品の話し相手として対応した。再体験になることを話題にしなかったことは、結果としてよかったと思われる。PTSDの治療では、非指示的療法よりもPTSDの要因になったことを再体験させる指示的療法が必要であるとの意見もある。患児の場合、お盆や命日を迎え、その行事に直面していたことを考えると、あえて箱庭の作品の中で再体験につながるできごとを言葉に出して触れなくてもよいのではないかと考えた。

患児の作る箱庭の最初の作品を見て、患児は妹の死を

浮かべ、箱庭の遊びの中にこのテーマを扱い再起を計っていると思われた。箱庭の作品は、恐竜や動物どうしの闘い、ワニに食べられている魚やカニ、動物の屍骸を置いた作品が多かった。子どもは闘いの場面を作ることが好きだから、動物どうしの闘いを描いたのかも知れない。しかし、このような作品のテーマは死とも考えられる。妹の死に対する悲しみや怒りを闘いとして表現した。妹の死を認めたくない気持ちと、もはや妹が現実の世界にはいないことの相反する気持ちを葛藤させ、繰り返し現実を自分に納得させようとした。箱庭に死を表現することによって、しだいに妹の死を受入れていったと思われる。

命日が近づくと情緒が不安定になり、学校での集団生活に不適應感が増した。命日前には症状の再発があることはよく言われているが、喪失体験のショックの強さをもものがたっている。命日が過ぎた1カ月後の作品は動物園であった。これを作成後、学校の図工の授業で人の顔を描くことができた。これまで顔を描くことは妹を思い出すことにつながり避けていたと考えられたが、動物園の作品後に急に患児の内面が動いたように思われる。すなわち、命日の前後で喪失体験の心理過程の急速な変化があり、妹の死を受け入れる適応の段階に入ったと感じられた。もちろん、これまでの動物の闘いの場面の繰り返しによる怒りと悲しみの表現、お盆や命日における家庭行事による現実の認知の積み重ねも急速な心理変化をきたす要因になったことは否定できない。箱庭の動物園の作品が命日と関係していることは、2回目の命日後の作品も動物園であったことから確実である。命日の前には特別なものを作りたかったのであろう。動物園の作品は家族を表現していると考えられる。きょうだい、親子楽しく過ごしていた頃の回想とともに、妹のいない現実の家族を表現したかったのであろう。2回目の命日前には、情緒は安定し学校において問題行動はなかった。2回目の動物園の作品は1回目より整然としており、しかもそれぞれの動物の親子が置かれた。同じ動物園の作品でも、2回目は心理的にもさらに成長し、心理過程の再起の段階を表現しているように思われる。患児は、命日前の情緒の不安定さを動物園という箱庭の作品で表現し、内面の感情を再構成することによって、喪失体験の心理過程、あるいは心的外傷からの回復プロセス（再体験、解放、再統合）⁷⁾を促進させたと思われる。

箱庭の作品の海水浴は、夏の一番楽しかった思い出として表わした。母親は、子どもを気分転換させるために

外出を多くするように努めていた。患児は、その中で楽しかったこととして海水浴を選んだ。このことから患児の箱庭の作品は生活や、自分のその時の感情と密接な関係にあり、このことから恐竜の闘いなどの場面は、単に子どもは恐竜や闘いが好きであるというより、妹の死と結びつけて考えるのが自然と思われた。

なお、箱庭療法の作品と生活状況、喪失体験の心理過程の変化の関係を図1に示した。

3) 学校との連携について

子どもの日常生活の大半は学校である。当然、カウンセリングや箱庭療法などの遊戯療法だけでなく、学校生活での教師の心理支援が必要であり、そのために学校との緊密な連携が大切である。

本事例のような場合、集団生活における子どもの問題行動は、PTSDによる症状であることを理解し、慌てず、怒らず、抱きしめるなどして安心感を与え、子どもの言い分を聴くことが大切である。いきなり命令や強制で行動の修正をはかってもかえって問題行動を増悪しかねない。図工の時間に顔が描けなかったことは、回避行動のひとつであるが、無理強いせず、子どもと向き合い接触を多くして子どもに感情表現を促す。子どもが安心して信頼できる人間関係を作ることを心がけなければならぬと考える。今回のような体験を有する子どもの場合、早期から医療機関と学校が連携し支援体制を確立しておくことが大切である。

文 献

- 1) 村田恵子, 内 正子: 親・家族と死別した子どもの心的外傷後ストレス反応とケアアプローチ, 小児看護, 24, 885-890, 2001.
- 2) 森 茂起: 外傷後ストレス障害の原因と心理的症状, 小児看護, 24, 804-810, 2001.
- 3) American Psychiatric Association: Diagnostic criteria from DSM-IV, 1994, 高橋三郎(訳), DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引き, 医学書院, 1997.
- 4) 筒井真優美: ストレス反応と心的外傷後ストレス障害を呈している子どもと家族の看護, 小児看護, 24, 853-862, 2001.
- 5) 日本小児精神医学研究会 編: 災害時のメンタルヘルス—兵庫県南部地震(阪神大震災)における小児メンタルヘルスへの対応マニュアルを中心として—, 日本小児精神医学研究会, 1995.
- 6) 河合隼雄: 箱庭療法入門, 誠信書房, 1969.
- 7) 西澤 哲: 虐待を受けた子どもの心理療法—虐待のタイプとプレイセラピー—, 子どもの虐待とネグレクト, 4, 87-96, 2002.

年 月	箱庭の作品	学校での状況	家庭	喪失体験の心理過程
X-1年12月			妹の死	ショック
X年 4月		情緒不安, 暴力行為, 早退, 集中困難	嫌な夢	否認
6月	1回目 恐竜, 動物の闘い	人の顔が描けない		悲しみ, 怒り
8月	5回目 海水浴		お盆行事	
11月	8回目 恐竜, 動物の闘い	情緒不安	夜尿 命日行事	
12月	9回目 動物園	人の顔が描ける クラブ活動参加		適応
X+1年4月			お盆行事 命日行事	
7月	13回目 海水浴	情緒安定		
12月	17回目 動物園			再起

図1: 箱庭療法と生活状況・心理過程の関係

Sandplay therapy for an elder brother with PTSD caused by the death of sister of the fraternal twins

Tsuneo Ninomiya, and Hiroe Tani

Department of Maternal and Pediatric Nursing, School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima, Japan

Abstract Sandplay therapy was experienced for a seven-year old boy with PTSD caused by the death of his younger fraternal sister who had aplastic anemia. His traumatic symptoms were includes frightening dreams without recognizable content, avoiding dark place, hospital and drawing the face, diminished interest and difficulty concentrating in schoolwork, irritability or outbursts of anger in his classroom.

Sandplay therapy can be used as a means to express feelings, clarify grief reactions, and identify needs. Repetitive works on sand occur in which themes or aspects of the trauma expressed. Systematically strategizing recall in a sandplay fashion promotes to exposure the traumatic event , and minimizes cognitive and behavioral avoidance. Sandplay therapy benefits children with PTSD.

Key words : traumatic experience, PTSD, sandplay